作家の自画像 3

自然のなかの私

河上徹太郎

昭和出版

自然のなかの私

河上徹太郎

昭和出版刊

著者：河上徹太郎（かわかみ・てつたろう）

明治35年山口県岩国生まれ・東京帝国大学経済学部卒業・文芸評論家・日本芸術院会員・昭和36年，多年にわたる評論家としての業績により第17回日本芸術院賞を授与された。

主要作品：「自然と純粋」，「私の詩と真実」第5回読売文学賞，「日本のアウトサイダー」第6回新潮文学賞，「吉田松陰」第21回野間文芸賞，「有愁日記」第3回日本文学大賞，「西欧暮色」等

作家の自画像　3

自然のなかの私　定価九八〇円

昭和四十七年九月二十日　第一刷

著者　河上徹太郎

装幀　山下敬子

発行者　吉富達彦

発行所　株式会社　昭和出版

東京都大田区西蒲田二丁目六—一八

〈広伸理工ビル〉　郵便番号一四四

電話／〇三—七五三—六七三六番

振替／東京一五八、三九六番

印刷・凸版印刷／製本・小高製本

© T. Kawakami 1972 Printed in Japan

0095—721103—3330

自然のなかの私　＊　目次

小　説

高原日記　11

自　然

多摩の丘から

都築ヶ岡の風物　37

都築ヶ岡の風物(二)　44

村のもの音　48

佐藤春夫氏追悼　50

春の多摩丘陵から　54

六月の野鳥と花　57

晩かった春の宴　59

柿生日記　61

山へシバ刈りに　63

フィレモンの嘆き
フィレモンの嘆き 65
柿生暮らし二十年 69
壊される自然への愛惜 71
三つの拒否 75
開発に思う 77
わが故郷
海から見た故郷 79
わが室積 82

猟と犬

柿生村猟信
私の猟 89
初猟 95
柿生村猟信 98
大島の猟 100
猟人の夏 103
猟閑期漫語 105
若い猟友 110

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

猟の愉しみと掟
白鳥の死 113
野鳥の色と味 117
狩猟法 120
エチケットということ 121
指さす 124
スポーツと社交 126
吉田松陰とハンター 129
錦川の鵜 132
犬は猟友 136
犬とジャーナリズム 141
猟犬 145
インターヴァル 146
或る日 147
犬と鳩 148
犬を育てる 149
犬がいない時

スポーツ

私のゴルフ
ゴルフ談議 153
戦後ゴルフの隆盛 158
もっとのんびりと 164
舟橋聖一君とのつき合い 166
初秋の休日 169
メトロのライオン、白洲次郎氏 170
私と野球
わが球歴 173
内村祐之の思い出 176

趣味

わが楽歴
私のピアノ修業 181
わが楽歴 191
晩学のピアノ 201
私のステレオ 202
ステレオと仏像 209
遊びの論

私の修学時代 213
わが青春の記 219
文学者とレジャー 221
私の俳句観 226

酒と味

酒日記
新酒の味 235
文士と飲み屋 237
銀座ののみや 244
冷酒 246
越路あまからの旅 247
周東酒日記 252
加賀の三日間 257
岐阜行 259
吉田健一 263
旅は道連れ、世は情 269
味日記
村の食べ物から 271

岩国の食べもの　275
岩国の「芋茶粥」　277
そばざかな　278
金沢から岩国へ　279
早春の旅　286

素　描

私の自画像　―わが戦後―　301
完璧な奴　川口松太郎

＊

あとがき　304
初稿発表覚書　306

自然のなかの私

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

初冬の浅間山

小　説

高原日記

九月にはいると、この高原の別荘地もすっかり淋しくなった。

私は、火山地帯に特有な焼石や草の刈株をゴム底の足袋の裏に擽ぐったく感じ乍ら、一直線の道を歩いていた。眼の前には、直径十里もあろうという大きな草原が、なだらかに波打っている。そして、所々代赭色の羊歯の生えた部分が、重たい秋の日を浴びて、特に強く金色に光っている。夏の間だらけきっていた空気も、めっきり澄んで鋭くなって来た。左手にあたるここから一番近い山は、それでも一里ばかり離れているのだけど、今日は山腹の緑の草が風に戦ぐのが一本一本見える様な気がする。

道の両側からは蟲の声が聞える。この大きな原の中には、恐らく幾万幾億とも知れぬ蟲が生きているに違いない。然し私の耳には、最も近い数匹の声がはっきり聞えて、他はガーという響きに溶け込んでいる。丁度ソプラノのソロに合唱がバスをつけている様だ。私は、この蟲の合唱と、秋の穹窿の大伽藍のステンド・グラスから分散する五彩の日光との間に、時々或る破格を感じて、それを意識的に匡正して行った。

私はもう大分歩いた。額には油汗が滲んで来た。然し合唱は前と少しもメンバーを変えないでついて来る。周囲の山々は、頑固に秋空の下に蹲っていて、依然として態(かたち)を変えない。私は、水車の上へ載って田へ水を汲む人の様に、只機械的に足を動かしているのであった。この周期的な運動は私の感受性を揺って次第に眠に誘った。尤も頭の中には、さっき食った馬鈴薯のおかずの昼食と共に、色々なものがかなり秩序正しく一ぱいに詰っていたけれど、それは恐らく、試験の朝の中学生の頭の中の様に、愚にもつかぬものに違なかった。何故なら、その中から時々ポツポツと、沼の中のメタン瓦斯の様に発生する思索は、あの堅い秋の空にぶつかって、カンカン響を立てて反撥して来るだけであった。私はこうやってシジフの様な無駄な歩行を続けることが、やるせない義務の様に感じられた。そして、右手に大きく見える暗紫色の浅間山の愚鈍さよりも、遙か遠い上州路の連山が、旧劇に出る武士の額の様に青く美しい色をして、済ましているのに苛立たされた。私は青空と私との間を静かに流れる秋風を嫉妬した。

私はいつも沼の辺に来て腰を下した。蠅がうるさく顔にたかる家の中を避けて、毎日ここへ読書に来るのである。殊にここは、地面が丁度籐の寝椅子の様な格好になっていて、柔かい草で蔽われ、それに空気も余計に冷たいのであった。沼の水は紫色に澱んでいる。小波一つ立たない。水面近く迄藻が浮んでいるけれど、恐らく金鎚と鑿とでこの堅い紫水晶の様な水を割らねば、それを取出すことは出来ないであろう。鮒の子の様な小さい魚が藻の間で体をかわして白い腹をピカリと一瞬間鮮かに光らせた。私はそれによって、この紫水晶の結晶の偏光鋭い断面を心臓に冷かに感じて戦慄した。

沼の岸には、三方に松や樅その他の針葉樹が密生している。その暗緑色の葉蔭を背景として、所々に苺牛乳の様な膚をした白樺の幹が浮び出ていた。その白緑色の葉は、自分自身の繊細な感覚に顫動

しつつ、小波に砕ける月影の様に散る。

開けた一方に裾野を隔てて浅間山が見える。猿が足を投げ出した様な格好の小さい雲が、今日も頂上にかかっている。それはそれよりも遙かに高い所にある高層雲に比べると、色も濃くて暗く何だか崇高な雲の中で仲間外れの感がある。然し噴煙ではない。私はいつもその雲に変な親しみを覚えるのである。

私は両手を頭の下に組んで、私のクッションの上へ寝転がった。左足を立てて右足をその上へ不器用に重ねると、爪先が心臓の鼓動に応じてピクピク動くのが、仰むいた私の視野の最下端へ映る。そしてその大きなはだし足袋をはいた足は、丁度猿の様な雲を蹴ることになる。その儘しばらくたった。

軽便鉄道が遙か遠方の谷間を、摺鉢で豆をする様な音を立てていやに響かせていたが、それが平原へ出ると単調な低い轢轆の音に変った。そして、小供が汽車ごっこをしている様に、駅へ止るや否やすぐポーッといって忙がしそうに発車してしまうと、次第に遠ざかって行って、あたりは又物音一つしなくなった。頭の下で指の位置を換える毎に、草の擦れる音が馬鹿に大きな空虚な響を耳に与える。そのうちに手が疲れたので私は起き上って煙草に火をつけた。その煙は重たい空気の中を静かに真直上ったが、やがて空の雲のない紺碧の部分を探しあてて、後から後からその中へ溶け込んで行った。私は彼等の素朴な喜に思わず微笑んだ。然しこんな大自然の中で煙草は甚だ粗雑な味がするものである。私は脂(やに)が汚なく滲んだ GOLDEN BAT という字の所へ目を移すと、すぐそれを沼の中へ投げた。シュッと歯切れのいい音を立てると、その白い残骸は滑らかな水の面で前より一層醜く感じられた。その上に白い牛乳の様な煙が微かに葡っていた。

あたりの静寂は私を落着かせた。再び仰むけになっていると、そのうち胸の中で何だか大きな塊が

極めて徐々に動いてゆくのを感じて来た。然し又それは動くのではなくて溶けてゆく様にも思えた。それは朝霧が霽れてゆく様な、胃の中にある食い過ぎた餅が次第に消化されてゆく様な、又氷柱の先から溶けた水が週期的に滴る様な感じであった。アルプスの大雪谿の氷河は一日に僅か二三尺宛流れてゆくそうである。私の中にあるこの氷河の微かに軌る響に耳をすませることは快かった。私はこのものを倦怠と名づけることを知っていた。然し今は「時」は私にとって残酷な怪物ではなくて、懐かしい恋人であった。私は彼女が淡紅色の外衣を着て、非常に高い雲の階段を静々と降って来るのを見た。この時私はこよなく幸福であった。

私はその儘どの位の時間を経過したのか知らない。ふと気がついて見ると浅間山の頂上の猿の様な雲は消失していた。空はすっかり霽れ、太陽は少し西に傾いて脂っこい天ぷら鍋の様にギラギラ輝いていたのである。その瞬間だ。風景は実体鏡で覗いた様に劃然と固定してしまって、前より一層鮮かさを増していた。空は益々堅く、空気は益々緊縮し、野は黄金色の炎のうちに蘯漾し、水は果しない深い眠に陥った。そしてコローの絵にある様な椎の老木の森は、突き刺す様な日に照されて、その緑の頂きから次第に蒸発して空へ溶け込むのであった。その上、この恐らく野卑に迄過度に眩惑する風景は、私自身をも一点景としてその中へ閉じ籠めようとした。この時世界は劇を紛失して静物から成立っていたのである。私は息苦しく感じた。あらゆる時間の進行が停止し、自分の心臓の鼓動さえ感じられなくなった。私はこの急場を逃れるために、手にあるチェホフの短篇集に救を求めた。然しそれを開いて見ると、驚いたことには、ザラザラした紙の上に密教の秘法の様な大小の黒い活字が並んでいるばかりであった。——よろめき乍ら私は立上った。その影に驚いたのか、一羽の田鳴が沼の向う岸の葦の中から、キュッ、キュッと鳴いて飛立った。そして長い嘴で巧に梶を取って、忽ち空高く逆光線の中の一つの小さな黒点と化してしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com